

支え合いマップで「徘徊ルート」探し

●それだけ探査の範囲を絞り込める利点

■徘徊探査システムの課題とは？

認知症の人の徘徊死が、社会問題になっている。そこで徘徊探査ネットワークのようなシステムづくりが広がっている。

このほど北海道旭川市の永山第二地区での活動の説明を関係者から受ける機会があった。

永山まちづくり推進協議会が、徘徊者の探索を主眼とする永山SOSネットワークを立ち上げた。中心は町内会だが、これに様々な企業や機関団体が加盟している。

徘徊によって行方不明の情報が入ると、これらの町内会、機関団体に伝えられて、一斉に動き出す。ここまではいいとして、気になるのは、どれだけのスピードで探し出せるかだ。旭川市の冬は厳しい。寝間着などで徘徊をすれば、一日も持たないのではないか。だから、徘徊情報からどれだけ早く探し出せるかであるが、そのためには探査の範囲をできる限り絞り込む必要がある。そこで私はこのために支え合いマップ作りが役に立つということを提案させていただいた。

■徘徊ルートが明らかに

これから一つの事例を紹介するが、支え合いマップづくりで認知症の徘徊事例が出てくると、私どもは必ず、参加した住民に徘徊ルートを尋ねるのだが、これまで何十例も出てきたが、ほとんどのケースについて、おおよその徘徊ルートが描けることが分かった。

住民はそれほど人の動きをよく見ているということであり、複数の人の情報を併せると、このように徘徊している人が自宅からどこへ行き、どのようなルートで自宅に戻ってくるかが、わかるのだ。

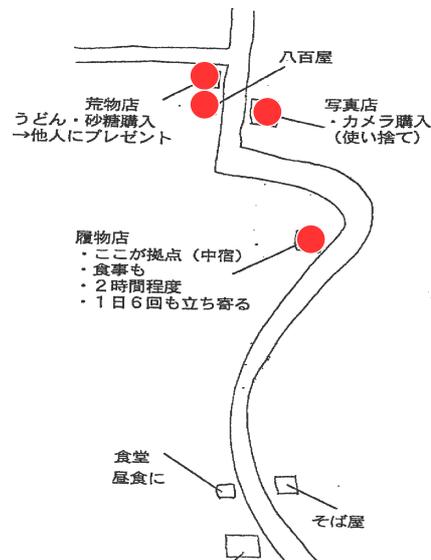
ということならば、徘徊を始めた人についてすぐに支え合いマップづくりをし、おおよその徘徊ルートを把握しておけば、その人が通常のルートを外れて、行方不明になったとしても、その範囲はある程度は絞り込める。

だから今までのように、行方不明者が出たら、加盟団体のすべてが動き出す必要はなく、例えば〇〇町内会、〇〇町内会とその周辺を集中的に探してほしい」といった指示の仕方ができるはずである。その結果、最悪の状態は免れる可能性が高くなるのだ。

■立ち寄り先も見守る人も

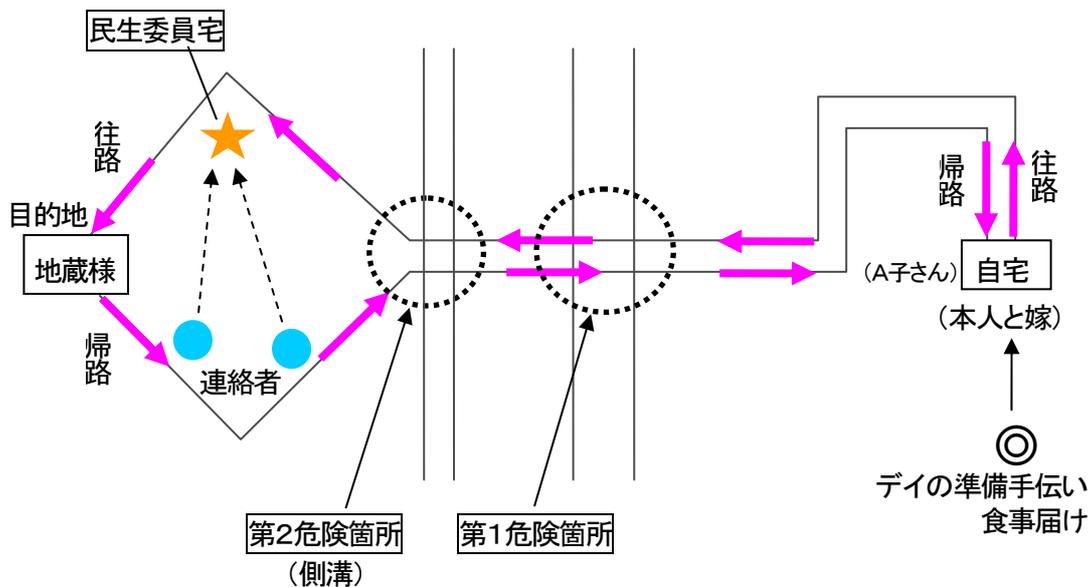
支え合いマップの効用はまだある。次のマップを見ていただきたい。ある女性の徘徊（というよりは散歩）ルートを洗ってみたら、彼女がどの家や店に立ち寄っているか、その順序までが見えて

くる。しかもこの中の履物店は特にお気に入り、ここに日に何度も立ち寄るらしい。店主が世話焼きで、この人を慕っているらしい。店主は彼女のために毎日弁当を作ってあげていた。



ここまでわかると、徘徊ルートの誰と誰がこの人を見守っているとか、どの家や店に立ち寄るはずだということも、情報として流せるので、それだけ効率的になる。徘徊ルートマップに加えて、本人の立ち寄り先や見込んでいる人、本人を見守っている人などの情報も付け加えておけばいいのだ。

A子さんの「散歩」ルート（1日2回、約2km）



■徘徊ルートをすべて特定

和歌山県白浜町の社会福祉協議会で行ったマップづくりの場でも、これに関わるテーマが出てきた。

マップをご覧いただきたい。この地区で1人の女性（80代・認知症）が、約2キロの道のりを日に2回散歩していることが、住民の話題になっていたのである。

最近はやや疲労気味のようにもあるが、1日2回、しかもこの行程のどこも省略することなく歩き続けている。目的地はお地藏様で、そこにお参りをする。お上げする物を誰かが見ていたら「たわし」だったりして、認知症であることは明らかだが、この行程をこなしているときは、そういう感じはないらしい。

■空白地点がないか確認

それならそれでいいだろうとも言えるが、その途中、ダンプが猛スピードで走っている大通りを横断しなければならない。今はもう信号無視というから、よく事故が起きないものだと、まわりの者はヒヤヒヤしているらしい。もう一つ、側溝がある所も危険箇所だという。

この話を持ち出したのは、担当の民生委員（★印）で、さすがに気になるということで、自分の近くに来たときは気をつけている。その他にも2軒の家から、「今、うちの近くを通ったよ」と電話がかかってくるという。（マップ上に記載）

それにしても、今までは大丈夫だとしても、これからも大丈夫とは言えない。しかし大部分の住民は知らん顔だ。ならば、この女性にみんなで関わっていくことで「助け合いのご近所」づくりのきっかけにしたらどうか、ということになった。

やるべきことは、いくつかある。

(1)徘徊のルートで、①A子さんに気付いている人、②様子を見ている人、③気づいてはいないが、一応接点にはいる—例えば、この道をウォーキングしている人、毎日車を走らせている業者、通学している生徒、道端で畑仕事をしている人、道端にある店の主、窓からよく外を見ている人などに該当する人を徹底的に探し出す。

(2)このために手分けをして、A子さんの散歩ルートをすべてチェックする。こうして、まずどれだけの人がA子さんのことに気付いて様子を見ているか、または接点にあるかを、マップにのせていく。

(3)家族、自治会、老人会、警察などと接触して、それぞれA子さんのことをどの程度意識しているか、何らかの関わりをしているかを確認する。

(4)それらの情報をもとに、彼女の歩行ルートのどことどこが見守られていて、どことどこに空白ができているのかを特定する。

(5)特に危険箇所については、念入りに接点にある人を探し出す。

(6)できれば、A子さんの見守りに（日々の生活や業務の中で）参加する人たちで見守り連絡会を開き、どういう点を心得たらいいかを確認し合う。A子さんの症状の進み具合も知らせる。何か異変を察知した場合にどうすべきか、どこのだれに連絡すべきかも知ってもらう。

(7)この人たちが実質上の「認知症サポーター」なのだから、連絡会のついでに認知症について知ってもらおう。

(8)A子さんはあまり意図的に見守られることは好まないようなので、これらの活動はなるべく水面下で行わなければならないのだが、その制約の範囲内で、A子さんのことを地元の人たちみんなで見守り、支えていこうという気運をつくることはできないか。そのためにはお嫁さんの協力も欠かせない。

(9)これらの一連の行動を主体的に推進していくグループ（チーム）をつくる必要がある。大学のゼミが、ぐるみで動いてくれると助かる。学生のフィールドワークのテーマにしてもらうなど。それが無理なら関連組織が連帯してすすめるしかない。自治会、老人会、警察（交通安全指導員）などで連絡会をつくって、そこが主導してすすめる。場合によっては地元の高校生でもできるのではないかな。

(10)A子さん支援の活動が一段落したら、認知症対応、特に徘徊対応について蓄積してきたノウハウをマニュアルにまとめるといい。他の認知症の人が出てきた時に、これを応用できる。

(11)A子さんの徘徊対応を通して、要援護者に対する住民の姿勢がどう変わったか、助け合わねばという気運が生まれてきているか、また認知症を隠さない地区になりつつあるか—なども評価してみる。その上で、次に取り組むべきテーマを探っていく。

認知症の一人ひとりに対してきちんと関われば、このように豊かな活動になるのだ。

■ネットで取り組んだら？

旭川市のような探査ネットワークができていれば、今述べたようなことを加盟団体で協力して取り組んだらどうか。ネットを作っても、事件が起きない限り何も動かないのでは、メンバーの士気も高まらないのではないかな。